異郷で聴く沖縄民謡
－北米・南米へ越境した丸福レコード－

高橋　美樹

『高知大学教育学部研究報告』第72号抜刷　2012年３月

論　文

異郷で聴く沖縄民謡
－北米・南米へ越境した丸福レコード－

Okinawan Folk Music Heard by Okinawan Immigrants Living Abroad
: The Marufuku Record Co., Ltd. Across Borders in North and South America

高橋　美樹（高知大学教育学部・音楽学研究室）

Miki TAKAHASHI

Laboratory of Musicology, Faculty of Education, Kochi University, Kochi, Japan

This article examines records of Okinawan folk music that were sent and produced by the Marufuku Record Co., Ltd., crossing foreign borders to Okinawan immigrants living abroad. Choki Fukuhara sent the sounds of home, Okinawan folk music, to the immigrants using three methods. In the first method, Fukuhara sent the master of the Marufuku record to a foreign country, where it was manufacture pressed and sold. In the second method, the master of the Marufuku record was duplicated for the enjoyment of individuals. In the third method, one could buy the re-pressed master record.

はじめに

筆者はこれまで沖縄音楽のレコード文化史について研究を進めてきた。とりわけ高橋2007では、1927（昭和２）年に設立された沖縄音楽専門レーベル・丸福（まるふく）レコードの活動に焦点を当て、制作した音楽ジャンルや参加した演奏者の特徴、レコード販売方法と購買層を分析した。

本稿の目的は丸福レコード制作による沖縄音楽レコードが国境を越え、海外の沖縄系エスニック・コミュニティの人々に届けられた実態を明らかにすることである。特に正規の輸出経路とは異なり、丸福レコードを複製した海賊盤などの制作・販売によって、南北アメリカの沖縄系エスニック・コミュニティの人々に聴かれていたレコードに主眼をあてる。

また、沖縄出身の普久原朝喜（ふくはらちょうき）が大阪で丸福レコードを設立した大きな要因として、内外蓄音器商会で朝喜が録音した沖縄民謡レコードの存在が挙げられる。これまで内外蓄音器商会と朝喜の関係は、雑誌インタビューにおいて朝喜の言葉で語られていたものの、レコードの詳細については長らく不明であった。しかし、筆者が2008年に石垣市立八重山博物館で調査した際、内外蓄音器商会制作のレコード（以下、内外レコード）が発見され、曲名や演奏者などを把握することができた。

本稿では、まず初めに朝喜が録音した内外レコードの実態について整理し、その後、海外に越境した丸福レコードについて論を進める。なお、掲載するレコード写真は全て筆者自身による撮影である。

1　内外蓄音器商会による沖縄民謡レコード

本項では、1.1において普久原朝喜が内外蓄音器商会と関わりをもった経緯を記述し、1.2では朝喜が内外蓄音器商会で録音したレコードの詳細を整理する。さらに、1.3では内外蓄音器商会の活動歴について記述する。

1.1　内外蓄音器商会と普久原朝喜

沖縄県越来村（ごえくそん）（現：沖縄市）出身の普久原朝喜は、1927年に出稼ぎ先の大阪で沖縄音楽専門の丸福レコード（普久原商会）を設立した。沖縄で歌三線（うたさんしん）の名手として知られた朝喜は普久原一家の経済的困窮を救うため、1923年に大阪へ渡ったのである。1925年には行商を始め、販売していた商品の中にSPレコードがあり、蓄音器の修理も請け負っていたことがわかっている。沖縄にいた頃から、レコードや蓄音器など最新のマスメディアに興味を抱いていた朝喜は、大阪でも後のレコード制作につながる技術を磨いていた。今回、石垣市立八重山博物館で発見された内外レコードは、朝喜が丸福レコードを設立する前年の1926（大正15）年に制作されている。

合資会社・内外蓄音器商会で沖縄民謡を録音した経緯について、朝喜は次のように語っている。

「いくらか小金もたまったので、尼崎市の抗瀬で喫茶店

をはじめたのが昭和のはじめの年です。結構繁昌して1日に3円から5円ほど儲かっていましたが、開店して間もなく内外レコードという会社からレーディングの話が舞い込みました。店の方も儲かっているし、随分迷ったのですが、3度のメシよりも好きな民謡です。店をたたんで1ヵ月ほど練習をし、「ハンタバル」や「ナークンニー」を吹き込みました。ところがレコード会社は約束の100円を払ってくれません。腹はたつし、またぞろ民謡がやめられなくなっていたものですから、思い切ってレコードの〝自費出版〟を考えた。それがマルフクレコードのスタートでもあったのです」[1)]

上記の語りには、1926年に喫茶店という当時モダンな商売を始め、軌道に乗っていた矢先、朝喜が最も得意とする沖縄民謡の演奏・録音の依頼があったことが示されている。そして、その依頼を引受け、喫茶店を閉めてまで、1ヵ月間民謡を稽古した行為には、初めて自分の歌をレコーディング出来る高揚感と少しでも質の高い歌を残したいと意気込む朝喜の姿勢が表れている。

なお、1974年10月7日付『沖縄タイムス』には「当初1ヶ月60円の契約で引き受けたが売れ行きが悪く、内外蓄音器商会は僅か30円を支払うのみであった」と、記されている。上記の語りにある「約束の100円」と金額は異なるが、朝喜に契約通りの賃金が支払われなかったことは事実なのであろう。1927年夏、朝喜は「吹き込んだレコードを全部買い取り、またそれを持って行商をはじめている」〔普久原1975:31〕。契約金未払いの件に憤りを感じた朝喜は、レコードの自主制作を本格的に考え、1927年大阪市西淀川区大和田町に丸福レコードを設立する[2)]。丸福レコード設立の背景には、内外蓄音器商会からの録音依頼と契約金未払いという経験が多大な影響を与えていたのである。

1.2　普久原朝喜初のレコーディング

筆者は2008年3月、沖縄音楽のレコード調査のため、石垣市を訪れた。その際、石垣市立八重山博物館に寄贈されたレコードを閲覧する機会を得ることができた。そして、閲覧していた際中に、朝喜が沖縄民謡を録音したSPレコードを発見したのである。内外蓄音器商会によるSPレコードは2枚寄贈されており、レコード盤の一部が劣化して欠けているものもあった。それまで朝喜が初めてレコーディングしたSP盤の詳細は不明であったが、インタビューで語られたレコードの存在がこの時、明らかになった。レコードの曲目や歌手・演奏者、レコード番号などについては、表1を参照されたい。

表1には、NO.1レコード（S-135：S136）、NO.2レコード（S-143：S144）の詳細を記録している。その中で、朝喜が歌手・演奏家として参加しているのはNO.1

表1　普久原朝喜が録音した内外レコード（八重山博物館所蔵）

NO	発売年	ジャンル	曲名	歌手・演奏者	レコード番号	発売元
1	1926	不明	コティ節	平良雄一, 胡弓/永村清蒲, 笛/中村寛明	S135	内外蓄音器
1	1926	小唄	戀の花節	豊福亭・崎濱カメ子, ヴァイオリン/普久原朝喜	S136	内外蓄音器
2	1926	長唄	干持節・揚竹田節	平良雄一, 胡弓/永村清蒲, 笛/中村寛明	S143	内外蓄音器
2	1926	小唄	九年母木節・ハンダバル節	普久原朝喜・豊福亭・崎濱カメ子	S144	内外蓄音器

※発売年は普久原朝喜年譜参照

写真1　《九年母木節・ハンダバル節》
普久原朝喜・豊福亭・崎濱カメ子

写真2　《戀の花節》豊福亭・崎濱カメ子
ヴァイオリン:普久原朝喜

レコード（S136）、NO. 2 レコード（S144）である。NO. 1 レコード（S136）のレーベルは写真 1 を、NO. 2 レコード（S144）のレーベルは写真 2 を参照されたい。

次に、レーベルに記載された文字を手掛かりに詳細を整理する。

NO. 1 レコード（S136）は沖縄民謡《恋の花節》を豊福亭と崎濱カメ子が歌い、朝喜がヴァイオリンを担当している。だが、ヴァイオリンのみの伴奏で沖縄民謡を歌うことは稀である。表記はないが、豊福亭と崎濱カメ子のどちらかが三線伴奏をしていた可能性がある。丸福レコードの録音ではヴァイオリンを同郷の渡慶次憲行が担当していたため、朝喜が演奏することはほとんどなかった。しかし、内外蓄音器の録音では実験的な試みとして、敢えて沖縄民謡に洋楽器のヴァイオリンを導入したのかもしれない。

NO. 2 レコード（S144）は沖縄民謡《九年母木節》《ハンダバル節》をS136と同じメンバーで録音している。レーベルには楽器名の表記がないため、どの楽器で伴奏していたのかは不明である。だが、《ハンダバル節》は1.1の朝喜の語りにも登場した《ハンタバル》と同じ民謡曲を指し、朝喜が最も得意とする三線早弾きレパートリーの 1 曲である。よって、朝喜が三線を演奏した可能性は非常に高い。NO. 1 レコード（S136）とNO. 2 レコード（S144）は、両盤とも破損が激しく蓄音器で聴ける状態ではないため、音源を実際に確認することができなかった。

NO. 1 とNO. 2 レコードのレーベルは、黒地に金文字、内外レコードの貝印の商標が中央上に位置し、旧吹き込み（電気吹き込み以前）のデザインである。レコード蒐集家の岡田則夫によると、内外レコードの基本タイプのデザインはこれらと同様だが、地色が黒ではなく濃いアズキ色であったという〔岡田1991.11:94〕。また、今回八重山博物館で発見されたレコードは 2 枚だが、「『ナークンニー（筆者註：ナークニーとも呼ぶ）』を吹き込みました」という朝喜の言葉が示すように、実際に発売されたレコードは 2 枚以上であったと考えられる。

1.3　内外蓄音器商会の活動

では、内外蓄音器商会とはどのような会社だったのだろう。山崎整によると、内外蓄音器商会は1924（大正13）年 8 月、松田文蔵と義兄の森垣二郎により、兵庫県武庫郡今津町川内（現・西宮市今津上野町）に設立された〔山崎1999.1.24〕。日本蓄音器商会に務めていた森垣は、内外蓄音器商会の専務取締役社長となる。第 1 回の新譜発売は設立した翌年の1925（大正14）年 3 月だったという〔山崎1999.1.25〕。商標は貝印であった。

1927（昭和 2 ）年 2 月発行の『貝印内外レコード総目録』にはジャンル名で区分された項目ごとに、SP盤のレコード番号、曲名、演奏者が記されている。総目録 1 枚目にはジャンルとして、俚謡、流行唄、江戸小唄、端唄・小唄、新内、清元、長唄などの歌いものが 7 項目ある。「山村豊子の音譜」と題した特別コーナー（俚謡、流行唄、端唄・小唄）が設けられている。浪花節、映画浪花節、義太夫、義太夫芝居、説教浄瑠璃、講談などの語りものが 6 項目あり、その他、太神楽、万歳、映画掛け合いという項目がある。

総目録 2 枚目にはジャンルとして、落語、声色、芝居囃子、音頭・祭囃子など日本の大衆芸能が 4 項目ある。琵琶劇、尺八、謡曲、箏曲、三曲、薩摩琵琶、筑後琵琶、筑前琵琶など日本の伝統楽器による独奏・合奏が 8 項目あり、演劇、映画劇、映画小唄など演劇・映画に関わる 3 項目と、書生節、新小唄など流行唄が 2 項目ある。その他、御詠歌、珠算の項目がある。西洋楽器による独奏・合奏・声楽は、器楽合奏、管弦楽、和洋合奏、ジャズバンド、軍隊喇叭、ハモニカ（原文ママ）、キシロホン、独唱、ボーカルソロ、バイオリンソロ、サキソホンなど11項目に及ぶ。そして、「子供の世界」と題した項目には民謡童謡、唱歌、教育童話、童話笑談、「笑ひの世界」の項目には滑稽風刺、喜劇が掲載されている。

岡田は、「内外蓄はどちらかというと、浪花節や万歳や端唄小唄など庶民を対象にした娯楽性の強い種目に主力をおいた会社で、高尚なものはほとんど手掛けなかった」〔岡田1991.11:92〕と述べている。しかし、『貝印内外レコード総目録』を見る限り、西洋楽器による管弦楽の項目では神戸SK管弦楽団、大阪UIオーケストラ団、大阪AK管弦楽団など、大阪府や兵庫県の管弦楽団が相当数、録音を実施している。また、内外和洋管弦楽団という内外蓄音器商会独自の管弦楽団を組織し、西洋楽器、日本の伝統楽器の双方に対応できる体制を整えていた。つまり、日本・関西の大衆芸能や伝統芸能を中心としつつ、西洋音楽の録音も積極的に行っていたのである。そして、子供を対象にした歌や童話に関しても、内外児童演劇団を組織し、録音を推進していたことがうかがえる。

『貝印内外レコード総目録』には「今や人気を背負って立つ貝印レコード」「人気ある所必ずや良品あり」「すべての長所を持つ貝印レコード」など、勢いのある宣伝文句が掲載され、電気吹込みへの転換期も低迷せず乗り切った一因を読み取ることができる。

岡田は「内外で処女吹き込みをした新人の中には、後年他社で沢山のレコードを出して有名になった人も多い。たとえば、昭和 3 ～ 4 年にかけてビクターで『波浮の港』『東京行進曲』『唐人お吉』などの大ヒットを出した佐藤千夜子。彼女の処女吹き込みは、内外の童謡『青い薄・鶯の夢』（ピアノ伴奏・中山晋平）である」〔岡田1991.

11:92〕と述べている。確かに『貝印内外レコード総目録』の「民謡童謡」の項目には「651：青い薄／652：鶯の夢」があり、佐藤千枝子（原文ママ）・中山晋平の名前が見られる。佐藤千夜子は芸名であり、本名は佐藤千代である。目録に「佐藤千枝子」とあるのが印刷時の誤植か、発売当時の芸名であるかは不明である。

また、1928（昭和３）年発行と思われる『貝印内外レコード　６月号月報』には「５月新譜／６月新譜」の曲目が掲載されている。月報では『貝印内外レコード総目録』のジャンル名に加え、讃美歌、常磐津、江州音頭が名を連ねている。

内外蓄音器商会の広告は、現時点で１件のみ入手することができた。図１を参照されたい。1928（昭和３）年７月23日付『読売新聞』掲載の「貝印内外レコード広告／８月新譜」は、『貝印内外レコード　６月号月報』の２ヶ月後の広告だと思われる。広告の右上には商標の貝印があり、軍歌の歌い手として内外コーラス団の文字がみえる。

1.2で朝喜の初レコーディングのSP盤について、その詳細を整理した。しかし、『貝印内外レコード総目録』の俚謡の項目に沖縄民謡の曲目は見当たらず、普久原朝喜の名前もない。レコード盤が発見されているので、プレス製造されたことは確実だが、実際販売されていたかは定かではない。蓄音器店などで販売されていたとしても、大正末期から昭和初期に関西方面へ出稼ぎに行った沖縄出身者[3)]が、レコードや蓄音器を購入できるほど経済的に豊かであったとは思えない。なぜなら、出稼ぎに行かなければならないほど、現金収入が必要だったからである。内外蓄音器商会は在阪沖縄出身者たちの購入を期待して、朝喜にレコーディングの依頼をしたのだろうか。しかし、予想に反してレコードの売行きが良くなかったため、朝喜本人にも契約金を全額支払えなかったと考えるのが妥当である。

山崎によると、内外蓄音器商会は1930（昭和５）年に「合資会社から株式会社へと組織を充実させるとともに、代表者が創業者の松田文蔵氏（発足時は森垣二郎氏との共同経営）から弟の松田光真氏に交代。同時に社名とレーベルを一新した」〔山崎1999.1.25〕という。内外蓄音器商会は大平蓄音器商会と改称し、商標も「貝印」から、貝印に星マークを加えた「貝星印」に変更したのである。大平蓄音器商会は、その後、朝喜が設立した丸福レコードのレコーディングやプレス製造を請け負い、２社の関係は継続される。

2　移民が聴いた沖縄音楽レコード

戦前、丸福レコードは大阪市西淀川区を本拠地として、レコード制作・販売を行っていた。販売方法は大きく分けて２種類ある。第１に、レコードを自転車に積み、朝喜自らが沖縄出身者の家を訪問して販売する方法である。第２に、丸福レコードのレコード目録を取次店などに置いてもらい、注文をとって通信販売する方法である。日本や日本国外からの注文について、朝喜は次のように語っている。

「娯楽とてない時代ですから、県人の方たちからとても喜ばれて、何種類も買ってくれました。そのうち神戸の春日井道や大正区、西成などつぎつぎと取次店ができ、やがて南洋諸島、南米、ハワイなどの県人からの注文がどっとくるようになります」〔普久原1975:33〕（下線部筆者）

上記の語りから、国内のみならず、海外に移民した沖縄出身者から数多くの注文が寄せられたことがうかがえる。国内では大阪市や沖縄県那覇市に丸福レコードの代理店、取次店があったことが確認されている（高橋2007）。しかし、南洋諸島、南米、北米、ハワイに、丸福レコードと契約を結んだ代理店や取次店があったかどうかは不明である。実際に「沖縄移民が渡航先で丸福レコードを聴いていた」という証言はあったため、レコードの入手ルートや聴取方法について調査を進めた。その結果、沖縄県金武町（きんちょう）教育委員会に移民が持ち帰ったレコードが所蔵されている事実が判明した。

図１　1928（昭和３）年７月23日「貝印内外レコード広告　８月新譜」『読売新聞』夕刊３面

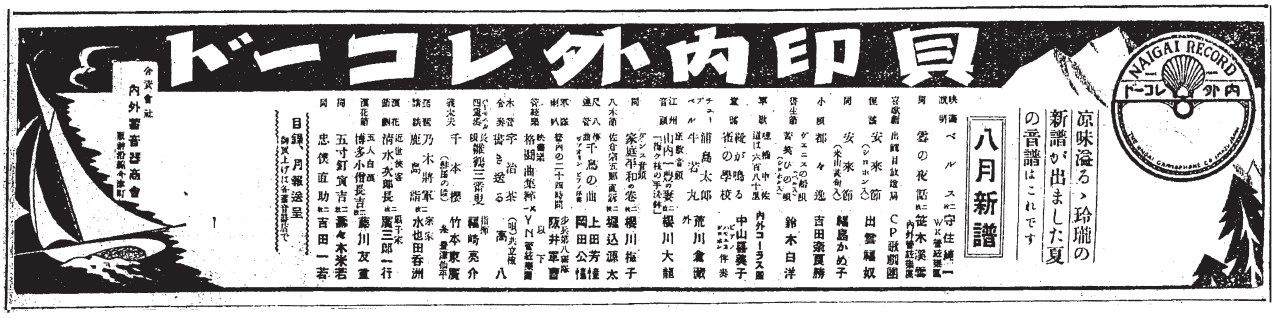


表2　北米で聴かれた沖縄音楽レコード（金武町教育委員会所蔵）

NO	曲名	歌手・演奏者	発売元	レコード番号	制作地	原盤用途	原盤のレーベル情報
1a	終戦数え歌	唄:池原盛光・眞榮城お豊, 琉球音楽会,布哇松竹オーケストラ	TROPIC	108-A	ハワイ		
1b	主と妻	三味線　ヴァイオリン　唄: 櫻家音子・仲村清次郎・渡慶次憲光	TROPIC	108-B	ハワイ	海賊盤	丸福-Taihei-1935年:S-598-A 歌劇《主ン妻節》普久原朝喜一行
2a	かぎやで風節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-644-A 唄三味:仲泊兼蒲　他
2b	恩納節・中城ハンタ前	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-644-B 唄三味:仲泊兼蒲　他
3a	金武節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-647-B 唄三味:仲泊兼蒲　他
3b	瓦屋節・ソンガネ	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-648-B 唄三味:仲泊兼蒲　他
4a	元散山節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-649-B 唄三味:仲泊兼蒲他
4b	仲間節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-649-A 唄三味:仲泊兼蒲他
5a	早作田節・仲順節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-651-B 唄三味:仲泊兼蒲他
5b	ナカラタ　ヨカネク	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1941年:S-648-A 唄三味:仲泊兼蒲他
6a	マンザイ口説	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1935年:S-588-A 《敵打口説　上(高平良万才)》普久原朝喜一行
6b	ウフンサヤリ節	記載なし	Oshige Sound System	大重時計店	ロサンゼルス	複製	丸福-Taihei-1935年:S-588-B 《敵打口説　下(高平良万才)》普久原朝喜一行
7a	屋嘉節	普久原朝喜	audiodisc	730(手書き)	ニューヨーク	複製	丸福-Taihei音響X429-730 三味唄:普久原朝喜・京子,琴:知名定繁, ヴァイオリン:嘉陽宗信
7b	懐かしき故郷	普久原朝喜	audiodisc		ニューヨーク	複製	丸福-Taihei音響X453-730 三味唄:普久原朝喜・京子,琴:知名定繁, ヴァイオリン:嘉陽宗信
8a	美童小唄	三味・唄:比嘉良順　マンドリン:普久原朝清	丸福-Taihei音響	RK639-700	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1939年:S-700-A 唄三味:比嘉良順
8b	スンガー節	三味・唄:普久原朝喜,唄:比嘉良順 マンドリン:普久原朝清	丸福-Taihei音響	RK641-700	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1939年:S-700-B 唄三味:普久原朝喜,唄:比嘉良順, マンドリン:普久原朝清
9a	西武門節	三味唄:仲村清次郎・仲本愛子 ヴァイオリン:渡慶次憲行	丸福-Taihei音響	M694-529	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1932年:S-529-A 唄三味:仲村清次郎,仲本愛子 ヴァイオリン:渡慶次憲行
9b	高離り節	三味唄:普久原朝喜・鉄子 ヴァイオリン:渡慶次憲行, 四ツ竹:永村清蒲	丸福-Taihei音響	M692-529	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1932年:S-529-B 唄三味:普久原朝喜・鉄子,四ツ竹　永村清蒲

2.1　北米で聴かれた丸福レコード

2.1では、北米に移民した金武町出身のＡさんが、沖縄に持ち帰ったレコードについて整理し、その特徴を考察する。Ａさんは明治生まれであり、大正末期に北米へ渡り、昭和30年代後期まで住んでいたという。その後、故郷である金武町に戻り生涯を終えている。平成に入り、Ａさんの親戚が残されたレコード一式を金武町教育委員会に寄贈した。表２は、それらの中から丸福レコードに関連があるSP盤のみを抜粋し、詳細をまとめたものである。

⑴　TROPICの海賊盤レコード

表２について、発売元別に整理する。まず、ハワイのTROPICから発売された1aと1bについて、1aは新録音であり、丸福レコードに関係するのは1b（レコード番号：108-B）である。レーベルの詳細は、写真３を参照されたい。1bは歌劇《主と妻》が櫻家音子・仲村清次郎・渡慶次憲光の３名によって演奏されている。レーベルには「三味線 ヴァイオリン 唄」と表記されているが、櫻家が唄、仲村が唄と三味線（三線）、渡慶次がヴァイオリンを担当したと思われる。

1bは海賊盤であり、その原盤は丸福レコードが1935年に発売した「歌劇《主ン妻節》」（演奏：普久原朝喜一行、S-598-A）である。海賊盤とは、不法に製作、複製、販売されたレコードを指す。特に、外国の著作物を著者・出版社の許可を受けずに複製販売したものをいう。1bが海賊盤である根拠として、以下の３点が挙げられる。

１点目は、「仲村清次郎」が普久原朝喜の変名だという事実である。９ａ《西武門節》の歌手名に「仲村清次郎」と記されているように、丸福レコードのSP盤にはこの名前が多数見受けられる。沖縄民謡や歌劇を録音できる歌い手が少なかった時期に、朝喜本人のレコードばかり制作していては聴衆への印象が悪いと考え、「仲村清次郎」という変名を使い発売した。しかし、朝喜の歌声を熟知している聴衆には、変名だということがすぐに知られたという。

２点目として、戦後、丸福レコードが（S-598-A）を再プレスして発売したレーベルに、「喜歌劇《主も妻節》」（演奏：桜家音子、M1002-598）と記されていることがある。この再プレス盤は、写真４を参照されたい。原盤と再プレス盤には「598」という共通の数字が、レコード番号の一部に印字されている。櫻家音子の櫻が新字体の「桜」になり、タイトルも《主と妻》と《主も妻節》では表記が異なるが、同じ作品（歌劇）を示していることは確かである。

３点目として、丸福レコードのSP、EP音源をCD復刻した12枚組『沖縄民謡大全集』Disc-３に歌劇《主ン妻節》が収録されている。演奏者クレジットには、仲村清次郎（唄・三絃）、櫻家音子（唄・三絃）、渡慶次憲行（ヴァイオリン）とあり、1b（レコード番号：108-B）と一致する。渡慶次憲行の名が正しく、TROPICの「憲光」は誤植だと思われる。

中原ゆかりによると、TROPICはマサジ・ウエハラが設立したレコード会社であり、「大部分のレコードは1948年～1949年に製作され、数枚が1951年頃まで製作された」〔中原2004:146〕という。また、「録音はホノルルのアレキサンダーというスタジオで行い、ロサンゼルスで製品化してハワイで販売していた」〔中原2004:146〕。丸福レコードは戦争が激化した1942年に制作を中断し、戦後1952年に活動を再開している。よって、TROPICが108-Bの原盤として使用したのは、戦前に発売された

写真３　TROPIC《主と妻》櫻家音子・仲村清次郎・渡慶次憲光（108-B）

写真４　丸福レコード《主も妻節》桜家音子（M1002-598）

写真５　Oshige《かぎやで風節》

写真６　Oshige《恩納節・中城ハンタ前》

写真７　Oshige《瓦屋節・ソンガネ》

写真８　Oshige《金武節》

写真９　丸福レコード《早作田節・仲順節》仲泊兼蒲（S-651-B）

S-598-Aであろう。ハワイには移民による沖縄系エスニック・コミュニティが存在し、戦前戦後を通じて沖縄との往来も多かった。TROPICは沖縄系エスニック・コミュニティにおける何らかのルートから丸福レコードのSP盤を入手し、複製・販売に至ったと推察される。

(2)　Oshige Sound System の複製レコード

日本では明治以降、平面盤（円盤形）レコードの販売を始める際、商店などに副業的に委託するほかに方法がないということになり、時計屋と自転車屋が委託する商店に選ばれたという〔森垣1960:27〕。よって、アメリカのロサンゼルスにあった大重時計店においても、Oshige Sound Systemという名の元にレコード販売や複製を副業的に行っていたことは想像できよう。

表２の2a～6bはOshige Sound Systemが発売元であり、その全てが丸福レコードから発売されたSP盤の複

製である。2a〜5bのレコード4枚（音盤8面）は沖縄で名高い仲泊兼蒲（なかどまりけんぼ）の琉球古典音楽のレパートリーであり、6a〜6bは舞踊「敵打口説（高平良万才（たかでいらまんざい））」の曲目である。

2a〜5bは1941年に発売されたレコード（S-644-A）（S-644-B）（S-647-B）（S-648-A）（S-648-B）（S-649-A）（S-649-B）（S-651-B）と、レコード番号がほぼ連続している。この点が原盤の複製であるとする要因の1つである。また、写真5　Oshige《かぎやで風節》仲泊兼蒲、写真6　Oshige《恩納節・中城ハンタ前》仲泊兼蒲、写真7　Oshige《瓦屋節・ソンガネ》仲泊兼蒲、写真8　Oshige《金武節》仲泊兼蒲のレーベルを見ていただきたい。曲名は全て手書きで記されており、印刷によるものではない。複製した後に、業務にあたった者あるいは依頼者が、自筆で書いたのだろう。この手書きの曲名が複製である要因の2つ目である。

6a《マンザイ口説》〜6b《ウフンサヤリ節》は舞踊「敵打口説(高平良万才)」を構成する組曲中の2曲である。1935年に丸福レコードから発売された《敵打口説上（高平良万才)》（演奏：普久原朝喜一行、S-588-AB）を原盤として、複製されたものが6aと6bであろう。なお、5a《早作田節・仲順節》の写真はないが、原盤レーベルの写真9　丸福レコード《早作田節・仲順節》仲泊兼蒲を掲載する。

⑶　audiodiscの複製レコード

7aと7bのレーベルに記載されたaudiodiscについて、詳細は不明である。直訳すると音の円盤、つまり、レコードを指している。audiodiscとは、TROPICやOshige Sound Systemのような会社名を示すのではなく、原盤を複製したレコードに表記する記号のようなものであろう。

7a《屋嘉節》普久原朝喜のレーベルには、手書きで

写真10　audiodisc《屋嘉節》普久原朝喜

写真11　丸福レコード《屋嘉節》普久原朝喜（X429-730）

写真12　audiodisc《懐かしき故郷》普久原朝喜

写真13　丸福レコード《懐かしき故郷》普久原朝喜（X453-730）

「730」という数字が記してある。「730」は、表２の原盤情報で示した丸福-Taihei音響《屋嘉節》普久原朝喜（X429-730）のレコード番号と一致している。つまり、（X429-730）を複製したものが7a《屋嘉節》「730」だといえる。

7b《懐かしき故郷》普久原朝喜のレーベルに数字などの記載はないが、丸福-Taihei音響《懐かしき故郷》普久原朝喜（X453-730）を複製したものであろう。普久原朝喜年譜〔備瀬1993:100〕によると、《屋嘉節》と《懐かしき故郷》は1952（昭和27）年に発売されている。よって、7aと7bも1952年以降、何らかの方法でＡさんが２枚のレコードを入手し、原盤を複製したと考えられる。なお、7aは写真10を、7aの原盤は写真11を参照されたい。同じく7bは写真12を、7bの原盤は写真13を参照されたい。また、《懐かしき故郷》（X453-730）は朝喜の作詞作曲よる新民謡であり、CD『チコンキーふくばる（SP盤復刻）』で音源を聴くことができる。

⑷　丸福レコードの再プレス盤

普久原朝喜は戦前、丸福レコードで制作販売したレコードの中で、特に聴衆の反応が良かったものを戦後活動再開した1952年以降に、再び発売している。8a、8bは戦前に丸福レコードで発売された原盤を、再プレス製造したものである。8aの原盤は、比嘉良順が1939年に録音した丸福-Taihei《美童小唄》（S-700-A）である。そして、戦後、タイヘイレコード（音響）株式会社において、（S-700-A）を再びプレス製造し発売されたものが、丸福-Taihei音響《美童小唄》（RK639-700）なのである。写真14を参照されたい。レーベルの下側に「TAIHEI ONKYO」という文字があり、タイヘイレコード（音響）株式会社により製造されたことが確認できる。

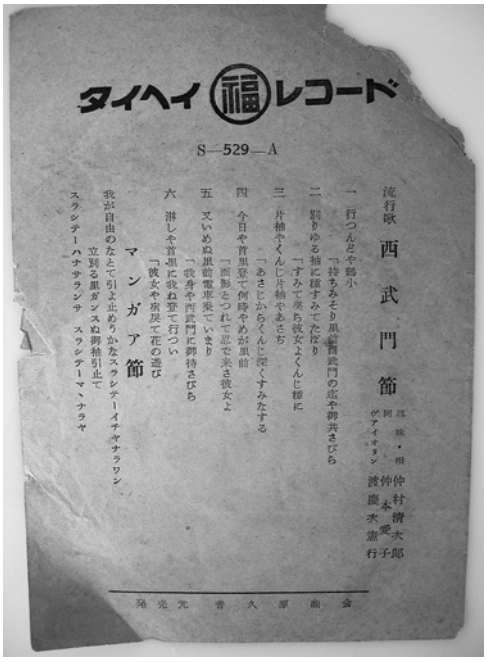
写真14　丸福レコード《美童小唄》比嘉良順（RK639-700）

同じように、8bの原盤は、比嘉良順・普久原朝喜が1939年に録音した丸福-Taihei《スンガー節》（S-700-B）である。そして、戦後、タイヘイレコード（音響）株式会社において、（S-700-B）を再びプレス製造し発売されたものが、丸福-Taihei音響《スンガー節》（RK641-700）なのである。

また、9aと9bも、1932年に発売された原盤レコードを再プレスしたものである。9aについては、写真15丸福レコード《西武門節》仲村清次郎（M694-529）を参照されたい。9aの原盤は、丸福-Taihei-1932年《西武門節》唄三味：仲村清次郎・仲本愛子 ヴァイオリン：

写真15　丸福レコード《西武門節》仲村清次郎（M694-529）

写真16　丸福レコード《西武門節》仲村清次郎の歌詞カード



渡慶次憲行（S-529-A）である。2.1で述べたように、仲村清次郎とは普久原朝喜の変名である。仲本愛子も、当時の朝喜の妻・鉄子の変名であった。金武町教育委員会に寄贈されたレコードには、写真16に示した歌詞カードも添付されていた。この歌詞カードの上部には（S-529-A）というレコード番号の表記がある。この表記は、原盤のレコード番号（S-529-A）と一致する。つまり、レコード盤は再プレスしたためにレコード番号を（M694-529）に変更したが、歌詞カードは1932年に発売した時と同じものを添えて、販売したのである。それゆえ、（M694-529）ではなく、原盤のレコード番号（S-529-A）が印字されていたと捉えられる。添付された歌詞カードのレコード番号そのものが、原盤を再プレスしたと考える所以である。なお、《美童小唄》（S-700-A）は先述したCD12枚組『沖縄民謡大全集』Disc-5に収録されている。

2.2　南米で聴かれた丸福レコード

2.2では、南米ブラジルのサンパウロに移民していたＢさんが金武町教育委員会に寄贈したレコードの中から、丸福レコードのSP盤について言及する。表３はそのSP盤の詳細をまとめたものである。

ア-aは、櫻家音子と普久原朝喜の唄・演奏による《情の歌》丸福-Taihei音響（M999-596）である。ア-aは戦前に制作された原盤を再プレスしたレコードである。原盤は、櫻家音子が1935年に録音した丸福-Taihei《情の歌》（S-596-B）である。また、《情の歌》は朝喜の作詞作曲よる新民謡であり、現在も沖縄で歌い継がれている。

ア-bは、櫻家音子と普久原朝喜の唄・演奏による歌劇《愛の雨傘》丸福-Taihei音響（M1022-596）である。ア-bも同様に、戦前に制作された原盤を再プレスしたレコードである。原盤は、唄三線を櫻家音子と普久原朝喜が担当し、1935年に録音した丸福-Taihei《愛の雨傘》（S-596-A）である。

再プレス盤のレコード番号にはア-a、ア-bとも（596）という数字が記されている。よって、プレス番号は異なるが、原盤は同一のレコード（S-596）のＡ面とＢ面ということがわかる。

Ｂさんがサンパウロに移住していた期間は不明であるため、このレコードを聴いていた時期も確定できない。戦後、サンパウロに移住したのであれば、沖縄を出発する際にレコードを購入して、渡航先に向かった可能性もある。あるいは、戦後に丸福レコードの再プレス盤がブラジルに流通し、それをＢさんが購入して聴いていたとも考えられる。いずれにしても、表３に示した１枚のレコードの存在によって、ブラジルに渡った沖縄移民が丸福レコードを聴いていたことは確認できる。

3　メキシコで制作された丸福レコード複製盤

CD『昔、こんな歌があった』は沖縄民謡のSP音源をCD復刻し、発売したものである。日本コロムビア制作の《安里屋ユンタ節》を初め、丸福レコード制作の沖縄民謡や沖縄歌劇、コンチネンタル制作の沖縄民謡が収録されている。３で取り上げるのは、1947年にコンチネンタルが制作した沖縄民謡《ハンタ原節》と《今帰仁手間當節》である。CDの作品解説を担当した小浜司氏は、《ハンタ原節》について次のように記している。

「当時『ハンタ原』と言えば普久原朝喜だが、そのインディーズ盤ともいうべきSP。コンチネンタルというレーベルはメキシコで作られ、ブラジルを経由してハワイで流通したと言われる。13に『今帰仁手間當節』も納めた。掛け弾きなどのテクニックを使わず、一音一音爪弾く三線奏法は何だか清々しい」[4)]

上記の解説によると、メキシコのコンチネンタルというレーベルが《ハンタ原節》と《今帰仁手間當節》を録音し、そのレコードがハワイで販売された。「ブラジル経由」に関しては２通りの解釈ができる。１つ目は、ブラジルの沖縄系エスニック・コミュニティで受容されたレコードが、その後、沖縄系ネットワークを通じて、ハワイの沖縄系エスニック・コミュニティに渡り、聴かれたという考え方である。２つ目は、メキシコからハワイへレコードが流通する中継地点として、ブラジルを位置づける考え方である。いずれにしても、レコードが北米南部のメキシコで制作され、南米ブラジルを経由して、太平洋に浮かぶハワイ島へ届けられたといえる。

筆者は、メキシコで沖縄民謡のレコードが制作されていた事に疑問をもち、調査を進めていた。その過程で、

表３　南米で聴かれた沖縄音楽レコード（金武町教育委員会所蔵）

NO	曲名	歌手・演奏者	発売元	レコード番号	制作地	原盤用途	原盤のレーベル情報
ア-a	情の歌	櫻家音子・普久原朝喜	丸福-Taihei音響	M999-596	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1935年:S-596-B 唄:櫻家音子
ア-b	愛の雨傘	櫻家音子・普久原朝喜	丸福-Taihei音響	M1022-596	日本・大阪	再プレス	丸福-Taihei-1935年:S-596-A 唄三味:櫻家音子・普久原朝喜

沖縄県那覇市在住の山城政幸氏が、コンチネンタル制作のSPレコードを所蔵していることが判明した。表４は、山城氏が所蔵するレコードの詳細をまとめたものである。

筆者は山城氏のご好意により、CD『昔、こんな歌があった』に未所収のレコード1-A《干瀬節》、1-B《宮古ニー》、3-B《述懐節》を聴く機会を得た。音源を聴きたいという強い要望の背景には、２つの疑問が存在していた。第１に、レーベル情報にある仲村渠喜進、安里菊枝という名前は、沖縄民謡の歌い手として認知されていなかった。第２として、終戦直後の1947年にも拘らず、沖縄民謡にギター伴奏というスタイルが斬新すぎる、と考えたからである。実際に音源を聴くと、1-A《干瀬節》、1-B《宮古ニー》、3-B《述懐節》からギターの音色は全く聴こえてこなかった。そして、その歌声はこれまで何度となく聴いてきた普久原朝喜の声、そのものだと確信した。つまり、丸福レコードの音源をコンチネンタルが複製し販売した、と考えたのである。

そこで、コンチネンタルと丸福レコードの両方の音源がある《ハンタ原》を取り上げ、比較することを試みた。なお、《ハンタ原》と《ハンタ原節》では表記が異なるが、同一の曲である。丸福レコードが戦前に制作したレコード目録をみると、２つの音源が確認できた。

《ハンタ原》は1931年（S-515-B）に録音され、普久原朝喜と妻・鉄子が歌っている。この音源はカセット『朝喜・京子の世界』やCD『チコンキーふくばる』に収められ、聴くことができる。

一方、《ハンタ原節》は1935年（S-592-A）に録音・発売された。筆者は（S-592-A）をタイヘイ音響[5]が、戦後に再プレスしたレコード音源（1014-592）を聴くことができた。そして、その音源はCD『昔、こんな歌があった』所収の《ハンタ原節》と同じものであった。つまり、丸福レコードが1935年に発売した《ハンタ原節》（S-592-A）とコンチネンタルの《ハンタ原節》は同一音源であることが確認できたのである。なお、丸福レコードを再プレスしたレーベルは、写真17を参照されたい。レーベルにはレコード番号（1014-592）の記載があり、（S-592-A）の再プレスであることの根拠となり得る。

《ハンタ原節》は1947年にコンチネンタルから発売されている。このことから、使用した原盤は1947年以前に制作販売されたものと推察する。しかし、丸福レコードは1942年に制作販売を一時中断し、戦後1952年にようやく制作を再開している。よって、1942年以前の1935年に録音・発売された（S-592-A）のレコードを原盤として、コンチネンタルが複製し発売したといえるだろう。

2.1(1)において、TROPICによる海賊盤について言及

表４　コンチネンタル制作の沖縄音楽レコード（山城政幸氏所蔵）

NO	曲名	歌手・演奏者	ﾚｺｰﾄﾞ番号	発売元	レコード音源	備考
1-A	干瀬節	三味・唄/仲村渠喜進　ギター/安里菊枝	P-479-A	コンチネンタル	あり	ギターの音聴こえず
1-B	宮古ニー	三味・唄/仲村渠喜進　ギター・唄/安里菊枝	P-479-B	コンチネンタル	あり	ギターの音聴こえず
2-A	ハンタ原節	唄・三味/仲村渠喜進・唄/安里菊枝	P-481	コンチネンタル	CD『昔、こんな歌があった』	丸福S-592-Aの複製盤
2-B	屋慶名クハデサー	唄・三味/仲村渠喜進	P-481	コンチネンタル	なし	
3-A	今帰仁手間當節	三味・唄/仲村渠喜進　唄/安里菊枝	P-482-A	コンチネンタル	CD『昔、こんな歌があった』	
3-B	述懐節	三味・唄/仲村渠喜進　ギター/安里菊枝	P-482-B	コンチネンタル	あり	ギターの音聴こえず

写真17　丸福レコード《ハンタ原》（1014-592）

写真18　コンチネンタル《今帰仁手間當節》（P-482-A）

した。今回、原盤とその複製であるコンチネンタルの音源が同一のものであることが確認された以上、同様に「海賊盤」を販売していたとみなすべきであろう。しかし、小浜氏の下記の発言には、「海賊盤」の定義にあてはまらない内容が含まれていた。

「マルフクのレコードが輸出され、それがボリビアやアルゼンチンなどに流れ、メキシコのコンチネンタル・レコードから複製盤が発売された。普久原朝喜は複製を承諾したという」[6)]

「海賊盤」とは外国の著作物を著者・出版社の許可を受けずに複製販売したものをいう。しかし、小浜氏の発言によれば、朝喜が複製すること自体を許可していることになる。つまり、著作権を持つ当事者、この場合、丸福レコードの代表である朝喜が複製を許可し、その上で、コンチネンタルが複製盤を発売、流通させたといえる。よって、表4に示した3枚のSPレコードは「海賊盤」と見なされないのである。

4　結論

普久原朝喜は異郷の地に住む沖縄出身者たちへ、〈故郷の音〉を届ける役割を自覚し、実践していた。レコード制作を通してその役割を実践したのは、朝喜自身も異郷の地である大阪で出稼ぎ者として生活し、望郷の念を満たすために沖縄の音楽を欲していたからである。“〈故郷の音〉を聴きたい、聴かせたい”という朝喜の強い想いが、丸福レコード設立に駆り立てたと考えられる。そして、その想いを実現する3つの方法が、本論によって明らかになった。

まず第1の方法として、丸福レコードの原盤を海外の現地に送り、プレス製造・販売させていた。沖縄音楽の歴史に詳しいビセ・カツ（備瀬善勝）は次のように語っている。

「戦後いち早く丸福レコードを再開した朝喜は、海外にいる同胞に商品としてのレコードを送ることができなかったので、南米、ハワイあたりには、原盤を送り、かの地でプレスして、県人はその歌を聞いて、ふるさとを思い、励みにしたという」［ビセ・カツ1980］

丸福レコードはプレス製造をタイヘイレコード等に委託していたものの、原盤は会社独自で保持していた。戦後の混乱で海外への流通が滞る中、原盤を海外の市場に送り、プレス製造を現地の会社に委託する手法をとっていた。つまり、1枚のレコード原盤が海外の沖縄系エスニック・コミュニティの人々へ、〈故郷の音〉を届けたといえる。2.1(1)で紹介したTROPICによる海賊盤、3で紹介したコンチネンタルによる複製盤が第1の方法に該当する。ただ、本稿ではTROPIC制作のレコードを海賊盤と捉えたが、コンチネンタルのように朝喜が複製販売を許可していたとすれば、海賊盤の定義から逸脱する。この点については、継続して調査を進めたい。

第2の方法として、丸福レコードの原盤を複製し、個人的に楽しむ方法がある。2.1(1)(2)で紹介したOshige Sound Systemやaudiodiscによって複製されたレコードが、この方法に当たる。写真5、写真7、写真10、写真12のレーベルを見てもわかるように、販売を目的とした複製ではないことは明らかである。あくまでも個人が〈故郷の音〉を聴くために、Oshige Sound Systemやaudiodiscに複製を依頼したと考えられる。

第3の方法として、原盤を再プレスしたレコードを購入する方法がある。朝喜の養子・普久原恒勇（ふくはらつねお）はSPレコード時代の制作について、一度レコードをプレスした後、ヒットするとプレス枚数を増やしていったと語っている［照屋・普久原1982：73］。この証言により、売れ行きが多いレコードについては聴衆の需要が高いと判断し、プレス枚数を増加させていたことがわかる。2.1(4)や2.2で紹介したレコードは、戦前に丸福レコードが制作した原盤を再プレスし、販売されたものであった。入手経路は不明だが、沖縄あるいは移住した現地で再プレス盤を購入し、異郷の地で〈故郷の音〉を聴くことができたのである。

本論において、北米・南米に住む沖縄出身者たちへ届けられた丸福レコードの実態が明らかになった。だが、レコードの流通経路や海外における特約店、取次店の有無については、以前不明である。この点については、次稿を待ちたい。

謝辞

本論をまとめるにあたり、石垣市立八重山博物館、金武町教育委員会、山城政幸氏には貴重な文献・音源資料を御提供いただいた。また、小浜司氏、中原ゆかり氏には多くの御助言、御教示をいただいた。ここに記して感謝申し上げたい。

註

1）1974年10月7日「沖縄の伝統を守る普久原さん」『沖縄タイムス』

2）戦前、録音やレコードのプレス製造はタイヘイレコード（兵庫県西宮市）で行っていた。普久原1969参照。

3）向井1990によると、1920年大阪における沖縄出身者の居住人数は1051人（男537人：女514人）、1930年の同人数は18092人（男9752人：女8340人）であった。

1920年代（大正末期〜昭和初期）の間に17.2倍に増加している。

4）小浜司、CD『昔こんな歌があった』（ンナルフォンレコード、25NCD-1003T、2003）解説p.21参照

5）丸福レコードのプレス先である大平蓄音器は1935年以降、他のレコード会社に合併、併合された後、1950年に社名をカタカナの「タイヘイ音響」に改め、タイヘイレコードを再スタートさせた。

6）筆者による小浜司氏へのインタビュー。実施年月日は2010年３月10日。

参考文献

岡田則夫、1991年11月「第14回　続・蒐集奇談」『レコード・コレクターズ』pp.92-99

高橋美樹、2007「沖縄音楽レコード制作における〈媒介者〉としての普久原朝喜　―1920-40年代・丸福レコードの実践を中心に―」『ポピュラー音楽研究』第10号、日本ポピュラー音楽学会、pp.58-79

高橋美樹、2010『沖縄ポピュラー音楽史』ひつじ書房

高橋美樹、2010「近代沖縄における録音メディアの導入　―ニットーレコード制作の八重山民謡SP盤を対象として―」『沖縄県立芸術大学附属研究所紀要　沖縄芸術の科学』第22号、pp.91-122

高橋美樹、2011「レコードに初めて録音された沖縄音楽　―1915年『琉球新報』と大阪蓄音器の活動を通して―」『高知大学教育学部研究報告』71号、pp.229-242

高橋美樹、2012（近刊）「沖縄音楽レコードにみる〈媒介者〉の機能　―1930年代・日本コロムビア制作のSP盤を対象として」細川周平編『民謡からみた世界音楽　―うたの地脈を探る』ミネルヴァ書房

照屋林助・普久原恒勇、1982「対談　島うた興亡記」『新沖縄文学』沖縄タイムス社、pp.68-77

中原ゆかり、2004「『ハワイ松竹楽団』の活動　―戦後ハワイで活躍した二世楽団―」清水昭俊編『太平洋島嶼部住民の移民経験』一橋大学大学院社会学研究科社会人類学研究室、pp.143-179

ビセ・カツ（備瀬善勝）、1980「ライナーノーツ／普久原朝喜小史」LP『朝喜・京子の世界』マルフクレコード

向井清史、1990「労働力の流出」『リーディングズ労働市場論　沖縄を中心に』沖縄労働経済研究所、pp.159-180

森垣二郎、1960『レコードと50年』河出書房新社

備瀬善勝。1993「普久原朝喜年譜」『普久原朝喜顕彰碑建立記念誌　チコンキーふくばる』pp.94-101

普久原朝喜、1969「創立当時のマルフクレコード」高江洲義寛編『沖縄音楽総目録X　録音目録』沖縄タイムス社、pp.269-271

普久原朝喜、1975「マルフク50年　琉球民謡とともに」『青い海』５巻５号、青い海出版社、pp.31-33

山崎整、1999年１月24日「関西発レコード120年／第７部　レコード各社興亡秘話【13】内外からマーキュリーへ（１）／森垣二郎氏の進言が発端」『神戸新聞』

山崎整、1999年1月25日「関西発レコード120年／第７部　レコード各社興亡秘話【13】内外からマーキュリーへ（２）／太平蓄設立ですべて一新」『神戸新聞』

参考音源

CD12枚組『沖縄民謡大全集』（日本音声保存、ANOC 6104-6115、2007）

カセット『朝喜・京子の世界』（マルフクレコード、CCF-22、発売年不明）

CD『昔こんな歌があった』（ンナルフォンレコード、25NCD-1003T、2003）

CD『チコンキーふくばる（SP盤復刻）』（マルフクレコード、ACD-3006、2003）

Okinawan Folk Music Heard by Okinawan Immigrants Living Abroad
: The Marufuku Record Co., Ltd. Across Borders in North and South America

Miki TAKAHASHI

BULLETIN OF THE
FACULTY OF EDUCATION, KOCHI UNIVERSITY No.72 2012
KOCHI, JAPAN